

# ふるさと、風

第82号 (2016年3月)

風に吹かれて (60)

白井啓治

『霜の上に雑草の生きて 紫の花可憐』

今年の日本列島にやって来た冬は、実に冬らしい冬ではなかったろうか。日本の四季は、其々が次の季節を迎える為にはならない重要な意味を持っている。しかし、四季はそれぞれ独立して自分のためにある。冬は春を迎えるために不可欠な季節ではあるが、冬は冬のために存在する季節なのである。

何だか理屈を捏ねる為にややこしく書いているように思われるかもしれないが、これは実に重大な事なのである。

こんなことを考えた事があるだろうか。季節は次の季節を迎えるために必要、と考えることが自然な考えのように思われるが、実は前季の後始末をするための時間なのではないだろうか。季節の移ろいはどうも人生に似ているような気がする。

現実の今を見て、多くの人が「自分は何をやっているのだろうか。毎日毎日何かの後始末や尻拭いに追われて、何一つ自分自身の満足のために使えていないのではないか」と思っているのではないだろうか。それで負け惜しみのために「これは明日のためにやっている事なんだ」と慰めている

ような気がする。こんな考えはひねくれ過ぎているだろうか。

もう三〇年ほど前になるだろうか。鳥取県の大山の麓の村に、ある記録映画の撮影で暫く行っていたことがあった。暖冬が何年か続いたような記憶があるが、その農家の老人が「冬は寒くなって大雪が降らないと困るんだ」という話をしていった。暖冬だと春に害虫が増えると言うのであった。厳冬によって自然のバランスがとられているというのだ。老人はこう言った。「今年の春は農薬の使用がまた増える」と。

これは冬は春を迎えるための準備の季節なのか、夏秋の後始末をしている期間なのか、結論するのが迷う所である。気分的には春を迎えるための準備期間と言った方が希望的に思えるが、後始末だつて次の希望を願つての後始末なのだから決して後ろ向きではない。

冬が本当に冬であるためには、厳しい寒さや十分な積雪が必要なのである。豪雪は現代生活に脅威をもたらすが、米どころに必要十分な水を供給してくれるのだから、刹那的に今の楽だけを考えての異常気象だとは言わない方が良いだろう。

人為的な地球温暖化とは別に自然の大きなサイクルでの寒暖は拙い人知で逆らう事を考えない方が良いのだろう。北極、南極の氷が解けだし生物

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

の分布に変化が起こってきている。しかし、それも地球という惑星の進化としての運動なのだろう。進化というのは、人間にとつて都合の良いことを言うわけではないので人類滅亡という進化があつても不思議ではないのだ。しかし、だからと言って人間の勝手、刹那な思いを通して良いということではない。

一つ言えることは、確かな後始末の方法のないことに、また解決策のみえぬままに刹那的な今の利を求めないことが大切であろう。

## 深呼吸の「間」を置け！

菅原茂美

『深い川は静かに流れる』と言うが、浅瀬で一杯、音を立てて流れるのも、アンチエーシングの一方であろう。国家の行く末を左右する重大事項については、沈黙居士を決め込まず、それぞれの機会をとらえて、積極的に発言していくのも、年長者の勤めとも言える。

私がいつも思うことは、地球環境の保全や、人類だけではなく、全ての生物が安全に暮らせるよう、広視野で物事を見ていきたい。その為には、人類は今、何をやらなければならないか、何をやってはいけないかに重点を置き、今日まで、浅学非才・独断と偏見を顧みず、私見を述べてきた。

しかし、暮れの総選挙や、差し迫った原発問題など、あまりにも近視眼的な、その場しのぎの議論が沸騰している現状に、我慢がならない。

近隣諸国のむき出しのナショナリズムや、国内の扇情的な大衆迎合主義で、国論を誘導する偏狭な動きは、あまりにも騒々しい。

元総理が、デモの真つ先に立って国会議事堂前を、脱原発のシユプレヒコールするなど、あれは何事だ？ 官僚排除・沖縄の基地問題・日米同盟の絆を、ゴチャゴチャにするなど、まるで害鳥の「野鳩」ではないか。

政府は尖閣諸島に『領土問題は存在しない』と言っているのに、野鳩は中国を訪問し、尖閣は、『双方係争の地』と発言し、ますます混乱を巻き起こした。トラブルメーカーもいとところ。

一方、遅いプロペラ機で領空侵犯すれば、日本はジェット戦闘機がスクランブル。中国からすれば、日本側の様子を見る、言わばゲーム感覚で遊

ばれている感さえ受ける。元々日本人とは、大陸で戦いに敗れ、逃れていった難民（弥生人）の子孫だ。いつでも、ひねりつぶしてやれる！ くらいに深層心理が働いているのかもしれない。一党独裁の国から見たら、民主主義など、国内世論が纏まらず、小規模政党が乱立し、毎年総理が変わり、半年に4回も所属政党名を変えた大物政治家もいる。日本は、自壊寸前で、必死の悪足掻きの状態と見えるのかもしれない。中国の軍師から見たら、今が攻め時：と見えるのか。本当は、からかいながら、日本の疲弊を待っているのかも？

それゆえ、私は後期高齢者ながら大口を叩いて恐縮だが、国家の行く末に關し、ここはじっくり深呼吸をして「間」を置き、熟慮すべきだ。遠い将来を深く読み切り、間違いを起こさないよう、霞が関や永田町は、真剣に考えてもらいたい。

\* \* \*

東京電力福島第一原子力発電所の事故により、放出されたセシウム<sup>137</sup>は広島原爆の168個分に相当するという。人は住みなれた故郷を理不尽な理由で強制退去させられるなど、こんな苦痛はない。(2011年6月現在、指定区域からの強制避難人口11万3千人。現在その他計<sup>32</sup>万人)。家族を引き裂かれ、人権も郷土愛も根底から奪われた。東電や原子力を推進してきた政府に、一体、どれだけの「償いの心」があるのか。深い心の傷を、どうやって癒してくれるのか？

復興対策の一部には、表面的な上滑りの感がぬぐえない。除染をやれば、手抜き工事。暴力団も関与しているとか。受注者は除染労働者の危険手当など賃金の上前をはねる。臨機応変に緊急対策を：と思えば、既存のガンジガラメの規制の法律

が邪魔をする。この際、特区を設け臨時に規制を解いて住民の速やかな帰還に全力を挙げる。なぜそれが迅速にできないのか。高齢者など、帰郷を見ず、避難先の他地で望郷の思いを募らせながら、孤独死などしている。シベリアに抑留された旧日本兵が、一日千秋の思いで厳寒の地に命を落としていった事と、結果は同じである。それほど罪深い事件なのに、責任のなすり合いなどをしている場合ではない。本腰を入れて復興にあたれ。

さらには農産物・海産物など、これから何年間生産できなくなることやら。その苦痛は筆舌に尽くしがたい。人生設計の根幹を覆されたこの大事件は、一体、誰がどう補償してくれるのか？

原子炉を廃炉にするにしても、何十年先とか言っているが、なにはともあれ、暫定的に、巨大なコンクリートで固め、放射能を遮蔽し、危険物を閉鎖しろ。チェルノブイリ(80万人で石棺封鎖)と状況が違う。もっと効率的に、暴れ獅子を檻に閉じ込める。時代も技術も進化した今の日本で、それが出来ない事はないだろう。：

地震・津波や噴火・巨大隕石落下など、全くの自然災害なら、大自然の前で、人間の小ささを納得し、諦めも付く。しかし原発は、危険なものとして承知しながら、その安全対策費を節減し、目先の利益を追求するなど、しかも国がバックのお墨付きの事業で、住民を苦しめる構図など、断じて許せない。危険地から強制移住させるのなら、補償の評価にあたり、現住家屋が未相続だとか、抵当権や住宅二重ローンなど、何とかならないのか。本当に避難民を思う心があるのなら、そんなシバリは、叡智を働かし、サッサと解除できないのか。移住にあたり『一個人に補助金交付はまかり

ならぬ：』これは官僚の決まり文句。それではあまりにも頭が堅過ぎる。省庁の縦割りのシバリをはずせ！ 臨機応変に：これほどの特異事件なのだから、もっと柔軟に、応用を利かすべきである。

\* \* \*

日本も政権が代わり『経済再建を最重点に：』と新総理が発言したら、まだ何もしていないうちから、泥沼のような長年の「円高」「株安」が、わずか一月で一気に好転した。あまりにも長かった暗黒時代に市場も敏感に反応したのである。

ヨーロッパのEU加盟国は、あつちでもこつちでも、お尻に火が付き、イギリスなど早速、EU脱退騒ぎまで引き起こしている。アメリカも政府債務の上限（1459兆円）が迫り、崖っぷちから転がり落ちそうな始末。それゆえ日本は、これまで円高に苦しみ、輸出が伸びないので輸出産業等、株安の連鎖。日本は、リーマンショック後の米国の不況や、ヨーロッパではギリシヤが沈没寸前などにより、よくよく円高に苦しめられた。おまけに、中国の反日運動や、韓国に、お家芸の家電製品シェアを奪われるなど、地獄のドン底であった。加えて今月で満2年を迎えた3・11の災害。地震・津波・原発事故のトリプルパンチ。これらの悪夢から、いかにして立ち上がるか。

\* \* \*

そこで問題は、原発の再稼働は、是か非か。日本は地震列島である。どこに原発を作ろうとしても、100%安全な場所などありはしない。考えてみたら、本来、高層ビル一つ建ちそうもない。

地震学者は、今、自分が甘い判断を下したため、後日、火の粉をかぶるのがいやだから、とにかく、厳しい判定を下しておけば、間違いはない：、と

いう風に見える。(イタリアで09年、地震学会は、巨大地震はすぐには来ないという安全宣言を出したら、すぐ大きな地震があり、科学者7人が「過失致死罪」で禁固6年の実刑判決を受けた)。そんな事があったせいか知らないが、原子力規制委員会は、実に厳しい物言いを行っている。当初13年以内に地殻が動いたものを「活断層」と言っていたが、この頃は、40年に一度動いた断層も、活断層と決めつけている。

【地球環境がこれだけ汚染しては、そもそも人類は、あと40万年生き残れるかは甚だ疑問である。なぜならば、今から30万年前に、ホモ・エレクトス原人から「旧人」ネアンデルタール人が生まれ、今から3万年前に、彼等はわずか27万年という「種の寿命」で滅亡した。同じく我々ホモ・サピエンスは、同じ原人から20万年前に「新人」として誕生した。兄貴分のネアンデルタール人の種の寿命が同じと仮定したら、我々現生人類の残りの種の寿命は、あとわずか7年しかないことになる。地球温暖化ガスが増え、水や土壌が汚染し、人口増加に歯止めがかからない現況では、人類はあと1万年生きられればいいところ。】

感情的に、全原発即廃止は、日本の実情に合わない。以降に述べる多くの理由により、日本は、時間をかけ、一呼吸置いて、再生可能な発電方法を改良研究し、それが十分機能したら徐々に原発廃止に向け、努力していくべきである。

3, 11の後、原発が一斉に稼働中止↓火力発電強化のためLNG(液化天然ガス)輸入が増え、たちまち貿易収支が史上最大の赤字(12年末6兆9273億円)になった。年間3.1兆円も、火力発電用のガス輸入に余計な金がかかる。当然、電力料金値上

げとなって跳ね返る。円安が進み、化石燃料輸入が増えれば、電力料金は、ますます値上がりが続く。国内の製造業は海外に転出、産業の空洞化が進む。製造業就労人口は、1992年のピーク時、1603万人から、2012年末には1千万人を割った。(しかし円安傾向は、まもなく世界中から逆襲の狼煙が上がってくるだろう。)

\* \* \*

新政権は、経済復興を支えるエネルギーのバックアップをどうするつもりか。阿部新総理の施政方針演説では、何も触れていなかった。経済・財政立て直しを高らかに掲げているが、その原動力となる「電力」をどうするかが重大問題だ。

再生可能エネルギー開発は、環境にも優しく、極めて有望な手段だが、太陽光や風力発電は、天候に支配され、設備費もかなり高額である。

日本は火山列島なるが故、アメリカ・インドネシアと同様、地熱発電は極めて有望である。しかし、その候補地は、『温泉が涸れる』『景観が損なわれる：』などと、猛反対をしている。

ドイツでは、原発廃止方針(現在17基中9基稼働中。22年に全廃予定)で、太陽光発電を大幅に伸ばしているが、太陽光発電。パネルは中国産の安いパネルに圧倒され、国産はギブアップ寸前だという。(ドイツは原発廃止しても、お隣のフランスで原発発電した電力を大量に輸入している。欧州の女王と呼ばれるドイツのメルケル首相は、10年までは原発推進主義であった。しかし福島事故以降、急激に脱原発主義に変身した。)

更に我が国では、太陽光発電等で生産した電力は電力会社が高額で買い取らなければならない。当然電力会社は、その分を電力料金値上げとして消費者に跳ね返ってくる。家庭用の電力料金は、

政府の認可が必要だが、工場など大型利用料金は政府の認可は不要である。30〜50%ぐらいの値上げはたちまちであろう。ということは、物造り日本の工業生産は、とても国内では、やっていけなくなり、産業の空洞化に拍車がかかる。結果は当然、雇用事情は最悪化。失業者はウナギ登り。低賃金労働者（月平均159,200円）よりも多額の生活保護費（月平均185,500円）を受けている受給者は増えるばかり。（現在、生活保護人口213万人。その費用は年3,7兆円）。この矛盾だらけの悪循環を、どう断ち切るか？

\* \* \*

そこで考えられるのが、安い料金での電力供給の問題だが、その一つとして原子力発電を無視するわけにはいかない。原発は、火力発電に比べると、地球温暖化ガスも出さず、発電コストも、安価である。再生可能エネルギーによる発電料金を、コストダウンできるまでの間、できるだけ短期間に限り、安全と確認された既存の原発を、順次、再稼働するほかあるまい。くれぐれも、安全第一の話である。新政府は13年度予算で、再生可能発電の切り札として、北海道・青森・秋田県海岸に、風力発電を増強することを決めた。

### 【発電コスト比較（1キ・ワット時あたり）…

太陽光（メガソーラー）<sup>30,1</sup> 45.8<sup>8</sup> 円、太陽光（家庭用）<sup>33,3</sup> 38.9<sup>3</sup> 円、バイオマス<sup>17,4</sup> 32.2<sup>2</sup> 円、風力<sup>9,9</sup> 17.3<sup>4</sup> 円、地熱<sup>11,6</sup> 円、水力<sup>10,6</sup> 円、石炭火力<sup>9,5</sup> 円、液化天然ガス火力<sup>10</sup> 円、原子力<sup>8,9</sup> 円】

今、発展途上国は、一斉に原発に飛びついてきている。日本も多数発注を受けている。それらの注文に対応し、危険と判定された既存の原発を、廃炉・解体するための技術者確保のためにも、科

学教育は、しっかり確保しなければならない。

\* \* \*

さて、放射線の危険性についてだが、自然界にはかなり大量の放射性物質が存在している。そして我々の体を構成する元素にも放射線を出す元素は常に存在している。誰でも継続的に毎日被曝している。例えば地球の大気の約78%は窒素である。その窒素原子に太陽からくる宇宙線が衝突すると炭素<sup>14</sup>という放射性元素に変換する。生き物は毎日その炭素<sup>14</sup>を吸入している。生物にとって、炭素は有機化合物などとして体を構成する最も重要な元素である。炭素<sup>14</sup>は生物に吸収されると、半減期5730年なので、その含まれている量を計測すれば化石年代など測定できる。このように自然界には放射性物質は、満遍なく存在している。人間が自然から受ける放射線の被曝は、外部被曝と内部被曝とに分けられる。外部被曝量は、宇宙線から年間390マイクロシーベルト（ $\mu\text{Sv}$ ）、地殻・建材から年間480 $\mu\text{Sv}$ 。内部被曝として、体内に存在している放射性核種（カリウム<sup>40</sup>と炭素<sup>14</sup>）から年間290 $\mu\text{Sv}$ 。更に空気中のラドン<sup>220</sup>から年間1260 $\mu\text{Sv}$ 。合わせて自然界から一人当たり年間平均2420 $\mu\text{Sv}$ の被曝を受けている。その他、場所にもよるが、地殻中の放射性物質から、一人年間480 $\mu\text{Sv}$ の放射線を浴びている。また、太陽からのX線 などが放射線は空気の一部遮断されているので、地上では少ないが、航空機など上空では高くなる。成田↓

ニューヨーク往復200 $\mu\text{Sv}$ なので年間900時間フライトする航空機乗務員は3000 $\mu\text{Sv}$ 被曝していることになる。

このように人体は、不可抗力的に、自然界から

常時被曝を受けている。更に医療関係でも、CTやX線など診断用や、私の場合、がん治療として大量の放射線を浴びたため、直腸粘膜の一部など酷いケロイドになっているが、ほとんど元氣そのもの。人間には少々の事には、へこたれない抵抗力がある。むやみやたら怖がって、変な基準を設け、多くの人々を恐怖の底に突き落とす害の方がずっと大きい。おそらく原発反対の大衆運動を引き起こしている人達は、「タバコの害」の方が、ずっと大きいことを見過ごしているのではないか。

原発停止は、日本の足元を見て、化石燃料価格を吊り上げられると、電気料金は高騰し、企業は日本脱出・雇用不安は増すばかり。借金大国の日本は、ここは冷静に判断し、長期展望で、国家の進む方針を見定める必要がある。大事故の後だけに、大衆のヒステリックな拒否反応と、扇動的に大騒ぎする人々もいるが、物の理屈をわきまえたうえで、冷静に判断し、国家百年の計を誤らないよう、政治家は、しっかり未来を見つめてほしい。

\* \* \*

さて、今回、福島原発事故で、放射能汚染したシイタケやシラスなど出荷停止となった。放射線は、細胞のDNAや、組織を破壊するから危険なので、食用にはいけないとしている。ならばシイタケやシラスの赤ちゃん（幼いほど放射能被害は大きい）は、自ら育つ時に、それほど危険な放射線を浴びたというなら、なぜ無事に成長できたのか。シイタケも人間も、細胞のDNAは全く同じ分子からできている。それほど危険な量の放射線を浴びたのなら、幼い命が育つわけはなからう。放射線に関するある講習会で、私が講師先生にこの点について質問したら、先生は明快な回答がで

かった。いや、講師先生は物事の本質はたぶん分かっていて。しかし行政の定めた基準に、文句は言えなかったのであろう。

食品の放射線は、ゼロでなければ納得できないというのであれば、そのような方は、この地球から、どこぞへ脱出したらよい。放射線ゼロの食品などあろうはずもない。空気も太陽光も水も土壌も全く必要としない食品があつたら教えてほしい。自然界に存在する、ある程度の放射線量には、しつかり抵抗できたからこそ、自然淘汰を免れ、現存の生物は生き延びられた。

国民は、一人一人が総理大臣になつたつもりで、いかにしたら国家が安全運営できるかに重点を置いて物事を決め、行動するべきである。ある決定は一部の集団には「正」かもしれないが、他の大分には、「迷惑」であるかも知れない。より多くの国民が喜ぶ選択をするのが民主主義であろう。原発関連で物事を見れば、中途半端の知識で大騒ぎするから、風評被害など、多くの人々を苦しめることになる。被災地の復興は、まずもって、日常の生産活動が軌道に乗ることであろう。マスコミは、偏狭の見識に振り回され、誇大妄想的に喧伝する。物事の真髓から外れた報道があまりにも目につく。

(先のIPS細胞から作った心筋細胞を患者に移植したとする森口尚史氏<sup>(48)</sup>の発表を、虚偽・ねつ造と見抜けず、トップ記事として報道した大新聞の編集責任者とは、一体、どの程度の見識を持つているのか…と、がっかりした)。

政府の定める危険な放射線量の限界値については、少ないに越したことはないが、日本では国際基準値の更に10倍の厳しい基準を設定し、これだ

け日本は安全性を重視した先進国だと言いたいのであろう。(先の牛肉のBSE問題でも、世界基準よりはるかに厳しい基準を設け、関係者から自殺者が出たりしたが、政府は、13年1月、あっさり世界基準に緩めた)。厳しければそれでよいというものではない。消費者の騒ぎ過ぎに政府も引きずられ、必要以上の厳しい基準を作る。これでは生産者が浮かばれない。学者は科学に忠実に従えばよろしい。消費者や、政治家の顔色を見て、余計な配慮は不要である。そして政治家は、厳正な科学の判断に従って施策を決めればよい。集票目的で、大衆受けをする変な基準など設けるべきではない。

\* \* \*

政府は、災害復興財源に充てるため、国家公務員給料を12年4月から2年間、7,8%下げている。(これを新政権は地方公務員にも適用要請。多分13年7月から実施見込み。実現すれば、1兆円確保)。まず公務員を、イジめるのが常套手段。義憤のあまり何度でもいう。政治家は、まず自分達の歳費を大幅に下げ、その数を減らして、襟を正してから、物を言え。

以上のような事から、日本は長年のデフレ・円高・株安などで、さんざん辛酸を舐めてきた。今やつと長い暗いトンネルから抜け出そうとしている。これから列島が活力を取り戻すためには、その原動力となる「電力」の安定供給が第一である。そのためには、現在保有する原発を、その安全性において徹底的に検討し、安全を保証されたものから順次再稼働すべきである。活断層の真上とか、旧式で故障ばかりしている原発は、即廃止すべきである。そして、再生可能な発電システムが確立

したなら、全ての原発は、速やかに撤退すべきである。3, 11の恐怖から、感情的に、全原発即廃止は、大きな混乱を招く。今、日本は、長期展望で、どの道を選ぶべきか。ソフトランディングへの道を見極めるために、じっくり腰をすえ、深呼吸の間において、深慮すべきである。拙速を避け、冷静な判断を待つ。

### シルクロードと金色姫伝説 木村 進

常陸国には養蚕の始まりを伝える三つの古い神社(常陸国の三蚕神社)がある。つくば市神郡の蚕影山(こかげやま)神社、日立市川尻の蚕養(こがい)神社、神栖市日川の蚕霊(さんれい)神社がそれで、日本一社、日本最初、日本養蚕事始とそれぞれが呼ばれている。そして、この三ヶ所に全てに金色姫伝説が伝わっている。少しずつ内容は異なるがつくば市の蚕影山神社の入口に掲げられた説明板の内容を抜粋して紹介しよう。

「昔、雄略天皇の時代(四七八年頃)に、天竺(インド)に旧仲国という国があり、そのリンエ大王には金色姫という娘がいた。皇后が亡くなり、後添えの皇后はこの金色姫を憎み、大王の留守中に、姫を獣のいる山や、鷲や鷹のいる山へ捨てたり、島へ流したりしましたがすべて失敗し、4度目は庭に生き埋めにしました。(これは蚕が四度脱皮を繰り返すことを暗示しています)しかしこれも失敗し、やつれた姫の行く末を嘆いた大王は、泣く泣く桑の木で造った舟に乗せ海に流したのです。そして常陸国の豊浦という地に漂着し、そこで漁師夫婦に助け

られ、育っていったのですが、病にかかり、亡く  
なってしまう。夫婦は姫の亡骸を清らかな  
唐びつに納めたところ、ある夜に、夢の中に姫が  
現れ、「私に食べ物を下さい。後で恩返しをいたし  
ます。」と告げました。唐びつを開けると、姫の亡  
骸は無く、沢山の小さな虫になっていました。姫  
がやってきた時に乗っていた舟が桑の木であった  
ので、桑の葉を採って虫に与えたところ虫たちは  
喜んで食べ、成長しました。ある時、虫は桑の葉  
を食わずに頭をもたげていました。心配して数日  
経つとマユを造りました。マユが出来ると、筑波  
の仙人が現れ、マユから糸を取ることを教えてく  
れました。これから、日本で養蚕が始まったと言  
われています。」となっています。

さて、この蚕影山神社は筑波山の六所神社に近  
い古の筑波山登山道（七八二年に徳・法師が筑波山に知足  
院中禅寺を建立した時に切り開いたとされる）の入口に近い  
場所です。神社のあるところは少し小高い山中に  
あり、樹木が茂る中を下から階段が続いています。  
麓に湧水はありますが、大きな川は近くにはあり  
ません。しかし、昔の地形では霞ヶ浦（流れ海に  
注ぐ川が近くに流れていたかもしれません。小貝  
川というのも元は「蚕養川、蚕飼川」から来たも  
のに相違はないはず。豊浦というのもこの神  
社の入り口付近では今でもそのようにも呼ばれて  
います。

次に訪れたのは日立市川尻の蚕養神社です。こ  
こは旧十王町と旧日立市の堺で、すぐ北側に有名  
な鵜の岬があります。6号国道からすぐ脇に社務  
所があり川尻海岸、小貝浜を見下ろせる高台（小貝  
浜緑地）の一角に神社が建っています。興味深いこ  
とに、常陸国風土記の多珂郡に出てくる律令制時

代の駅屋（うまや）「藻嶋」の近くです。風土記には  
ヤマトタケルがこの浜辺で、常陸国でもっとも美  
しい玉のような碁石が採れ、沖にはいろいろな海  
藻が多いのでこの駅屋の名前になったと書かれて  
いる場所です。大変風光明媚なところですがここが金  
色姫の流れ着いた常陸国豊浦湊というのかわかる  
気がします。豊浦という地名はこの付近に広く使  
われており、小貝浜という名前も近くにありま  
す。この神社の創建は不明とされていますが、今の  
神社の名前になったのは明治時代になってからで  
す。それまでは「於岐都説（おきつせ）明神」と呼  
ばれていました。そして、この於岐都説は鹿島神  
宮・香取神宮と並ぶ東国三社の一つ息栖神社から  
分社されたと伝えられています。一般には、三大  
実録に出てくる於岐部説神が東国三社の息栖神社  
のことだとされており、於岐部説（おきつせ）川  
洲で、この川洲（おきす）が息栖（いきす）になつた  
と考えられています。

この東国三社の一つとされる立派な息栖神社の  
歴史を調べると興味深いことがわかってきました。  
一般には息栖神社と鹿島神宮、香取神宮を結ぶと  
ほぼ二等辺直角三角形を形成するため、レイライ  
ンなどのパワースポットとしてよく知られていま  
す。しかし、この息栖神社は大同二年（八〇六）に  
現在の神栖市日川の地から息栖の地に移転された  
ものなのです。強引に鹿島神宮の真南、香取神宮  
の真東になるように移動したのです。この息栖神  
社が元あったとされる日川地区にもう一つの常陸  
の三蚕神社である「蚕霊（さんれい）神社」があり  
ます。

先日やつと三番目の蚕霊神社に行ってきました。  
利根川沿いの川原から少し離れた平地にこんもり

とした木々の茂る場所があり、ここに本殿が朱色  
に塗られた特異な神社が鎮座していました。ここ  
の入口にも同じような金色姫の話が掲げられてい  
ました。三神社とも少しずつ話は違っていますが、  
ほぼ同じような内容です。この日川の地も豊浦浜  
と呼ばれていたといひます。そして、この神社の  
近くに「蚕霊山千手院星福寺」という真言宗の寺  
には蚕霊尊と呼ばれる像が保管されていて、南総  
里見八犬伝を書いた滝沢馬琴がこの像や寺のこと  
を調べていたという記録が残されています。

この神社が息栖神社の本宮であったかどうかは  
不明ですが、日立市の蚕養神社が息栖神社の分社  
であり、それがまだ神栖市日川にあった時代なら  
こちらも於岐部説明神と呼ばれていたのかもしれ  
ません。この蚕霊神社が息栖神社の本宮であるこ  
とも十分に考えられそうです。またもう一つ、行  
方市川洲地区に於岐部説神社という小さな社があ  
ることも申し添えておきます。

さて、話を少し変えて、蚕から作る絹の歴史を  
みてみましょう。絹は紀元前三千年頃に中国です  
でに作られていたと記録されています。そしてこ  
の絹の製法は中国では門外不出とされ、長い間外  
国には伝えられなかったのです。そのためこの  
絹織物を求めてシルクロードができました。これ  
は一方で仏教の伝達にもなりました。そして陸路  
以外にも海路でも交易があったとされており、日  
本も陸路・海路とも、その東端にありました。反  
対側の西端は地中海沿岸国でした。シルクロード  
といえは一般には三蔵法師が旅した西域地帯を思  
い浮かべますが、日本も含めた交易圏と考える方  
が仏教伝来や養蚕の技法の伝来などの事象を考え  
るには理解しやすいようです。この中国の絹織

物は大変高価で金と同じような価値があったのです。ヨーロッパでは古代ローマ帝国などにも伝わったのですが、製法はわからず、十二世紀に入ってから初めてシチリアやイタリアで生産ができるようになったと言われています。一方日本での絹の生産は意外に古く、今から二千年以上前の弥生時代に絹の製法が伝えられ、九州北部の出土された中から絹が確認されています。また卑弥呼も二三九九年に中国（魏）に絹織物を献上したと記録残されています。しかし、技術的にはまだ未発達で、少し高度な絹織物は古墳時代になってからのようです。奈良時代の律令制にはこの絹織物が税として集められたのです。常陸国でも国府（石岡）を平将門が攻めて国府が焼かれた九三九年には、一万五千の絹糸が灰になったと将門記には記されています。

このようになりに古くから養蚕の技術も伝わっていたようですが、常陸国の養蚕神社が目目されるのは、江戸時代に入り、絹の需要が高まり、それまで高級な絹織物を中国からの輸入に頼っていたのが国産の絹織物を全国各地でも作るようになったのです。そしてこの養蚕の産地では、盛んに蚕神社が建てられました。そしてこの神社の多くが、常陸国の三蚕神社から分社されていきました。全国の蚕影神社はつくばの蚕影山神社から、また蚕養神社は日立市の神社から、また蚕霊（こだま）神社や絹笠神社は神栖市の蚕霊（さんれい）神社などから分社されたものと考えられています。

さて、この金色姫伝説では養蚕技術はインドから船に乗って伝えられたとなっています。陸路のシルクロードを通っての交易であれば仏教の伝来と同じく朝鮮半島経由でやってきことでしょう。

しかし海路のシルクロードも存在したはずで、このルートから外れて日本に漂流した船もあったでしょう。そのため、奈良時代より前に海路のシルクロードから養蚕が伝わったのかもしれない。土浦市坂田の武者塚古墳とかすみがうら市安食の風返稲荷山古墳（ともに七世紀築造といわれる）の出土品の中から経錦（たてにしき）と呼ばれる絹織物が発見されています。武者塚古墳の出土品は一年前に土浦市立博物館の茂木館長が発見したものです。いまのところ県内ではこの二点だけしか見つかっていません。二つの古墳はつくば市神郡の蚕影山神社は比較的近くにあり、この他常陸国としては常陸国二の宮である「静神社」は常陸国風土記に静織の里と書かれている倭文（しどり）を初めて織った場所とされ、また近くの常陸太田にある「長幡部神社（ながはたべんじや）」は美濃から秦氏が伝えたとされる全服（うっぱはた）といわれる紬の始まりとされる神社があります。この紬の技術が結城紬などに発展していったと考えられています。

金色姫の話の出处は享和二年（一八〇二）の「養蚕秘録（全三巻）」のなかに書かれている話が元になっているのかもしれませんが、この書物は今の兵庫（但馬の国）養父郡の上垣守国（うがきもりくに）が十八歳の時に、奥州で蚕種を買い求めて、研究し、蚕の起源から種類、伝説、飼育法等を絵入りで解説したものです。その書物にこの伝説も載っているといえます。それまでは養蚕技術について書かれたものがほとんど知られていません。それまで伝承として語り継がれてきたものが初めて書かれたものとなったのでしょうか。奥州（現福島県）に伝わっていた金色姫の伝承はどこかの地が発生場所かわかりません。しかし、当時常陸国や奥州では優

れた養蚕技術があり、これが但馬国（兵庫県）に伝わっていたのですから、当時はこの関西には優れた技術がなかったこととなります。この書物はヨーロッパにも伝わり、絹産業の発展に寄与したのです。そして上垣守国の偉業を記念して兵庫県養父郡大屋町に「上垣守国 養蚕記念館」が建てられています。

また石岡市八郷地区には十三塚という果樹園の盛んな地区がありますが、この名前に伝わる一匹の大ネズミとそれを退治して果てた十二匹の猫の塚との伝承も、この養蚕をネズミから守ってくれた猫を大切する信仰から作られていったものではない。他県ですが、いなくなった猫を探してくれる養蚕神社もあるそうですので、なかなか侮れない養蚕と常陸国なのです。

### 若松町の八幡太郎さま

兼平ちえい

毎年九月に行われる石岡のおまつりに華やかさを添える山車の上に乗る人形についてご紹介しています。初めに金丸町の弁財天さま、香丸町の聖徳太子さま、国分町の仁徳天皇さまそして今回は若松町の八幡太郎さまです。

若松町は石岡駅より御幸通りを進むと国道三五五線との丁字路を右折、間もなく香丸町交差点柿岡街道入口を左に折れると青木町になり、ほどなくして若松町に入ります。やがて前方に鳥居が見えてきます。間近になりますと八郷地区柿岡方面へ向かうには急な右カーブになりますが、曲がらずそのまま進むと神社への参道につながります。



鳥居とともに若宮八幡宮の石碑が目に着きます。

大木を背景に若宮八幡神社が鎮座しています。

神門は四脚門型式でありながら扉を設けず、後ろの間の左右を囲って随神門に似た造りとし、風神・雷神を祀っている。また前後の柱の型式を変えるといった珍しい手法も特徴となっているようです。また社殿は、外観は拝殿に見える型式でありながら内部には宮殿を造り付けており、一棟で本殿と拝殿の機能を兼ね備えています。

祭神は息長足姫尊、誉田別尊、姫大神。神龜五年（七二八）九月に建立されたと伝えられる。永保二年（一〇八二）、八幡太郎源義家が奥州征伐の折、当社に朝敵退散を祈願したと伝えられている。また応永二年（一三九五）、太田道灌が参拝し武運長久を祈願した。

古くはここ界限は長峰寺と呼ばれていたそうですが正徳四年（一七二四）二月二〇日郡奉行井上源藏の時代に「若松町」と改称されたそうです。

若松町の名の由来は町内に鎮座する若宮八幡宮境内の、八幡太郎義家、旗立ての松にちなんだといわれています。通称で呼ばれていた長峰寺は今の若宮一丁目のあたりにあった大きな寺院で明治三年二月十日夜、長峰寺付近からの出火で全焼してしまいました。

このような歴史のある若松町の八幡太郎さまについては、八幡宮近くにお住まいの区長さんのご紹介で若宮一丁目の小島様にお伺いする事でできました。小島様は九十歳、伺いました時にはいつもの散歩からお帰りの直後でした。年齢には到底見えず若若しく、優しい口調で丁寧にお話をしてくれました。

世帯数は八〇〇余戸、石岡では大町内に入るで

しょう。八幡宮に朝敵退散の祈願をした八幡太郎義家に因み、昭和三七年度の若松町年番の時に新調する事になり、祭りも近くして、埼玉の本庄市に向かいましたが希望の期日までに完成出来ないという事になり、岩槻市の八幡太郎さまになったそうです。現在の八幡太郎さまは平成一八年に新しくしたそうです。

今から四、五年前には毎年十月十日に八幡宮境内において大祭がおこなわれ、子供さんによる奉納相撲や芸能大会、夕方六時より、若松町の山車、八幡太郎さまと、おかめ、ひよつとこ、きつねの踊り手と、にぎやかだったそうですが、現在では、体育の日の子供さんの奉納相撲と獅子舞い、ひよつとこ踊りと以前よりは出し物が少なくなりましてにぎやかに大祭が行われているそうです。

ここで若松町とは離れますが石岡市内には八幡太郎義家にちなんだ地名や伝説が残されています。

#### ・生板池

八幡太郎義家が奥州征伐へ行くため五万の兵を引き連れて、この池を通った際、ここで食事をし、マナイタをこの池で洗ったと伝えられている。

#### ・八幡太郎と鞍かけの松 三村字八幡

阿部頼時は奥州全土を手にいれながら、租税を奉らないので、朝廷からの命により義家が東西の兵を率いて奥州に向かう途中、三村、八幡に差し掛かった。この時、軍馬が非常に疲れている様子に気づいた義家は、馬の背から鞍をおろし、一本の松の枝に鞍を掛け馬を休めた。このことから土地の人は「鞍かけの松」とか「八幡鞍かけ」の地名がつけられたと言う。

・八幡太郎と正月平（三村字正月平）

前九年の役後、清原氏が奥州両国に勢力をふるったが、やがて一族間に争いがおこったのに乗じて義家は藤原清衡を助けて奥州の地に戦いを進める（後三年の役）、途中三村正月平に差し加かった。その日が暦の上で正月にあたることから正月平と云う地名が付けられたという。

八幡太郎源義家は平安後期の武将で武勇人に勝れ、和歌も巧みであった。東国に源氏勢力の根拠をかためた。石岡には伝説なども伝えられ身近な親しみのある武将に感じられます。

何回も問い合わせの電話をして下さいました区長さま、ご丁寧にお話し頂きました小島様有難うございました。

参考資料 いしおか一〇〇物語

石岡の歴史と文化

#### ・梅つぼみ 雀に諭されなご固く ちえこ

#### 梅のように

伊東弓子

一生を終えた人の為にこんなにも多くの人が心を寄せてくれるものかとあらためて思った。息子二人と嫁さんが主になって、娘も脇役で進めていくてくれた。孫も集まった。韓国からも次女、三女夫婦が駆けつけて来た。涙を流す間もなく一日一日を頑張れたのも、「二、七日だね」「三、七日だね。元氣かね」と七日、七日に寄って来てくれる人がいたからだ。かけてくれる言葉の一つ一つが優しく温かく私を包んでくれたからこそ、この二ヶ月の冷たい、寒い、寂しいと感じずに過す



ことが出来た。私はこんな心配りをしてあげたらうか。ご主人や奥さんを亡くした友や知人のことを思い浮かべていた。

葬儀が済んで三週間経たない中に、三女家族がやってくる状況になった。これも夫が寄せたものか：と考えてみたりもした。

四月からと思っていた学校も「明日からでもいらつしやい」という。対応の早さに戸惑いながらも大喜びで忙しい準備に取り係った。反面不安は大きかった。特に一年生の弟は学校生活を始めて十ヶ月で環境が変わった事と、日本語がまだ不慣れな状態だった。名前も韓国語で呼んでいたのに、急に日本語で呼ぶことに大人の方が大慌てだった。そんな大人の戸惑いをよそに子供二人は「汰練だから、れんくんちゃんでもいいよ」との事。「そうね玉里の名物だしね」と大笑い。四年生の姉は日本語は小さい時から出来たので言葉の心配は小太りぎみな体型を話題になる事が婆さんとしての心配の一つ。早く馴染めるよう学校へ行つて遊んだり、通学区の子供の家に挨拶に行つた。一年生の女の子一人、二年生女の子二人、四年生男の子二人、女の子三人、五年生の男の子一人の通学班の仲間入りした。これから九人の人間の繋がりを紡いでいくことだろう。学校から一年生の子にはひらがな一覽表、漢字のドリル、算数の計算等いただいた。夕方は大声で「あいうえお」「あかさたな：ん」「がぎくげ」と読んでいたが、今は暗記してしまった。子供を育てていた頃の慌ただしげの様子も蘇ってくる。懐かしい夕方の賑わいも夫にも聞こえるだろうか。四年生の姉には二、三、四年の漢字のドリルを貸してくれた。黙々と書き取りや文章作りをやっている。

彼此一ヶ月が経とうとしている。友達の名が出てくる。校内での出来事も楽しそうに話している。弟の方も会話が上手になってきた。韓国の話しや言葉を知っていたが話しかけてくれる友も多いようだ。こうして毎日楽しく出かけて行っているが、いつの日か落ち込んだり、悩んだりする日があるかも知れない。躓いても転んでも起き上がって行って欲しいと願う。韓国の互洞、月枝洞、水原、烏耳島の保育園や小学校の事を小さな胸の隅に仕舞ってあるのだろうか。

自分達の過ごしてきたその時々にも色々な人間関係があつてその中で育つてきた事を思う。私は戦前の姿を色濃く残していた終戦直後が小学校時代だ。大宮神社と照光寺の森の帯にあつた校舎、森を切り開き、参道を取り込んで運動場が出来たので牛車や馬車がよく通つていた。糞が落ちていたのも珍しくなかつた。栗又四ヶは田舎第二小学校とよんで分校だった。子供心にも私達は本校、向うは分校と少し下にみる気持ちがあつた。でも第二校には至つて優秀な子が多かつた。中学生も同じ敷地内を移動しながら学習していた。校章は「桑の葉」常陸風土記に出てくる桑原ヶ丘はここ一帯という事から紋章になったという。今の子どもは知っているだろうか。時代にそぐわない為か壊されていった物、切られていった木々は数多い。活用されたり移動された物もある。大人も子供も同じ様に人への偏見をしていた。大人の言葉の中に疎開もん、引き揚げ者、朝鮮人、余所者や貧乏人と平然と呼びつけ、罵り差別していた。子供の苛めも当然あつた。名前から「やすやまねこがんどねこ」「からすのかんたは寒かろう」名前と体を結びつけ「ちびやす」「からまさ」「体でつかち小

便もらし」「ちび」「禿」と弱い者に浴びせかけた。学校内でも先生と生徒の関りが良いに着け悪いにつけあつた。

二年生の時の独身の女の先生の家によく遊びに行った。一里の道を歩いて一日遊んで、何度行つた事か。三年生の時の独身の男の先生は休み時間に運動場で陣とり、馬のり、石けり一緒に遊んでくれた。鐘が鳴ると皆で走って行くにの必ず教頭先生が出て来て受け持ちの先生を怒鳴つた。何でだったのか分からないが、その教頭先生は差別する人だったという。

可愛い女の子はすける(ひいき)んだって、ある男の子には「貧乏人の息子のくせに」と言つたと聞く。高学年になった頃には男性と女性の叱られ方は違つた。篠の鞭で頭を叩かれたり、白墨が飛んでくるのは男女変わりなかつたが、男性が悪さした時は全体責任という事で回しビンタという罰を与えていた。兵隊に行つた先生だった所為か叩くのはいやだ、皆で考えろ、知つていた人知らぬふりをした人、止めなかつた人、実行した者みんなに責任がある、との事だった。私も人を苛めてやろうという気があつた事を確りと覚えてる。

小学校の入学式、私の前にいる子が何か気になつた。口のまわりに腫物があつて「へんなの」と思った瞬間、髪の毛をツンツン引つ張つていた。後ろで見ていた父が「こら」と寄つて来て拳骨をもらつた。高学年になった私は一寸正義感に溢れていて弱い人を庇つて、乱暴者に立ち向かつたりした。その反動が妹、弟に向いて苛められていた。私と顔が合う度にエンピ、三本指、時には腐り手と言われた。前の二つは我慢が出来たが「腐り手」という言葉には悲しく、飛んで帰つて母の胸で泣

いた事があった。母は「ご免ね。ご免ね」というばかり「体の事で笑ったり、悪口言わないでね」と抱いてくれた。これから絶対心配かけない、と心に決め、悲しんだりしない、と決心した日だった。

中学校になると悲しむ事もなくのびのび出来た。男性たちは授業を無視したり、先生に綽名を付けたりしていたが、宿直の晩は遊びに行ったり男同士の楽しい時間も作っていた。近隣の中学生とよく喧嘩をしていたようだ。今となつては楽しい一つ一つのだろう。集まると話が弾む。

子供達の時はどうだったろうか。忙しく動いていた私に子供達はどの位心を開いていただろうか。思春期にどんな友や先生や大人達から人生への生き方を学んだだろうか。女の子達は部活の時、先生にひいきされているとか、お姉さんが出来るのに、貴女は下手ね等大部酷かったようだ。男の子の事では何度か呼び出されたが「あんな事して困ったもんだ」と女の先生に笑われた。先生つてそういうものかと思ひ足取りで帰った。担任が反対しても聞かず教務主任の命令で、体育館に生徒を集めて見せしめにしたという学校もあった。こういう事も教育の一つなのだろうか。息子のクラスで便器を手で掃除したが生徒の告げ口から父兄が怒り学校にやつて来た。親の口出しが多すぎると憤慨していた事があった。

チャボ先生とよばれ親しまれていた教頭がいた。中学校二百人の生徒の保護者名、仕事、地域、妹弟、地域の事が頭に入っていて常に声かけをし、気配りをしてきてくれた。私もあの先生には救っていたのだと思つている。

高校の校長先生が広範囲から集まってくる父兄に廊下で話しかけてきてくれた。学校は社会に出

る訓練の場です。少し位の失敗は大丈夫、お母さん見捨てないでね：と励ましてくれていた。

今「風」をお届けしている年配の女の方で、教育生活の最後を産休の代替として玉里小学校へ通われたそうだ。短い期間だったが、教員生活で一番楽しかったとの事。自然も父兄も子供達も先生方も良い印象で残つていて幸せだったと話される。こんな先生と何ヶ月か過ごせた娘も幸せだったと思うし、教育の場所としても故郷はよい所なのだと思確認した。

大きくなつた孫、まだまだ幼い孫達、いろいろのハンデを抱えていても親と共にのり越えて行つて欲しい。お爺ちゃんも育ち盛りに住居が何度か変わつて小学生の時など十二人も先生が変わつた事など孫達に聞かせてやつていた。いやだった事もあったけど、その時、その時頑張つてきたという様な話しをしてやつていた。大きい子達には状況を判断する力をつける様にと話してもしていた。

「お婆ちゃん、私達が日本に来て一ヶ月だよ」と声をかけられた。早いものだと思つてみると、「梅の蕾がいっぱい出来て大きくなつてきたよ、もうすぐ咲くね」

という声に出て見たが、急に涙が出た。夫はこの花を見ることは出来なかつた。でもこの子と一緒に見ることが出来た今、偏見や差別、苛め、体罰、悪口、ひいき、見せしめ等々沢山ある。それらにどう打ち勝つか、乗り越える方法を見つけ出すのは自分だ。そういう自分を支えてくれる良い仲間をつくつて貰いたいし、私もそう生きていこう。冷たい、寒い、寂しい冬を越えて咲く梅のように生きていこうと。

## 水戸城

小林幸枝

梅の花のたよりを聞くようになると、茨城県人としては水戸偕楽園の梅を思つてしまいます。偕楽園は、水戸徳川家九代の藩主斉昭が、天保十三年（1842）に領民と楽しむために梅を植えて造らせた庭園です。私はてっきり黄門様の趣味かと思つたのですがそうではなかつた。

偕楽園の事を思い出したのでついでに水戸城の事を見てみたら、水戸城は日本100名城の一つに挙げられていた。

水戸城は、那珂川と千波湖にはさまれた台地の先端に築城された連郭式平山城です。本丸の西側に二の丸が配されて、さらに西に三の丸が配されており、それぞれが空堀で仕切られていました。また、城郭にも石垣がなく、すべて土塁と空堀とで構成されていきました。徳川御三家の居城でありながら、尾張の名古屋城、紀州の和歌山城に比べるとかなり質素で、戦に備えた城と言うよりは政庁としての性格が強かつたと思われます。

水戸城の築城は古く、平安時代末期までさかのぼります。常陸国の大掾であった平国香の子孫である馬場資幹によつて建久年間に築城されたと言われ、佐竹義宣が入場するまでは馬場城と呼ばれていたといひます。

佐竹義宣は徳川家康によつて水戸を追放され出羽国秋田に転移させられた。その後徳川頼宣、そして徳川頼房が入城し、明治まで水戸徳川として御三家の一角を担ってきました。

## 【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光（4・4）

言い訳が少し長くなつたが、出羽の小豪族・本堂茂親が憧れた土地には、その様な因縁が含まれていたのである。茂親も欲を言えば国府が置かれていた府中が欲しかったけれども、既に六郷氏が貰つて登記を済ませている。止むを得ず、恋瀬川を挟んで隣接する地域を狙つた。どういふ理由かその地域は旧佐竹領でも未だに新領主が決まらずそこそこの代官が管理していた場所である。一万石に満たない端数領地の為かもしれない。

キリタンポだつたかハタハタだつたか確かめよう無いが、秋田名物の手土産を持つてお代官様を訪問した本堂茂親は「どうしてもこの土地が欲しいので、必ず貰うから…」と手付金代わりの賄賂を渡し、大急ぎで江戸城へ向かつた。既に大親分の徳川家康から「岩城国菊多郡内で二万石」の領地を与えられる内示を受けているから、それを断つて憧れの「景勝三点セットの地」を貰うように徳川秀忠に懇願する為である。秀忠は二代将軍になる人物であるが、本堂茂親がお願いに行つたのは家康が征夷大将軍に任命される慶長八年（一六〇三）一月二十一日以前であるから家康は未だ内大臣であり、秀忠は「将軍になる予定の人物」に過ぎなかつたが固いことは言つていられない。

秋田弁で訥々（とつとつ）と領地を取り換えてほしいと懇願する少年に秀忠は好感を持ち、願ひの筋が「二万石を八千五百石に変えて欲しい…」と、  
いうので驚いた。八千五百石を二万石に替えてや

つても良いと思つたくらいである。出来ることなら即決で許してやりたいが、大御所と呼ばれる家康が決めたことを変えるのは無駄な議員の定数を減らすよりも難しい。取り敢えず「良かろう」と返事をしておいて、爺さんが死ぬのを待つて許可証を出すことにした。

こうして出羽国仙北平野の一隅に和賀の分流として生き抜いてきた本堂氏が、茂親の代に常陸国新治郡内の志筑（上・中・下）、佐谷（上・中・下）、稲吉（上・下）、土田、東野寺、雪入、高倉、栗田、大峯、横堀などの村々を仮にはあるが頂くことになつた。関ヶ原合戦の翌年か翌々年に父祖伝来の地である仙北平野を離れた一行は雪の降らない筑波山麓へやつて来た。土分の者だけでも四〇余名が従ひ、合計では数百名になつたと推定されている。来てはみたものの親戚や知人が居た訳では無いから暖かくは迎えて貰えない。辛うじて下佐谷の名主である福田与惣右衛門を頼り其処に茂親を居候させ、家臣団は付近の農家に分散して御厄介になつたのであろうか。

この福田与惣右衛門の祖先は、佐谷近辺を領していた大掾一族に縁の繋がる武将であつたと言われている。多分、その頃から周辺諸村の惣名主を務めていたのであろう。東北地方から転がり込んで来た本堂茂親主従及びその家族たちは志筑領に定着する際に此の人物に助けられている…にも関わらず後の世に、この藩は確実に「恩を仇で報いる所業」をする。ただし、その時代には本堂氏の血筋は断絶して、全く関係の無い人物が名跡を継いでいたから父祖と称する源頼朝に傷はつかない。

其の辺の因果関係は後で触れることにして、程なく与惣右衛門の斡旋で威徳院という寺院を借り

ることが出来た。新領主の本堂茂親は其処を城替わりにして新領地での藩政を開始することになる。余計な心配だが檀家に葬式が出来たら本堂氏が本堂を空ける約束であつたかどうかは知らない。

殿様の間借り暮らしが何時まで続いたか記録は無いが、藩としての陣屋を旧・大掾系の佐谷氏が居館を構えていた笠松古城跡に置いたのが寛永三年（一六二六）とされている。しかし、その数年前に領民に依つて陣屋門が引き倒されるという封建制度下では珍しい事件が起きており、それが威徳院の山門らしいから、罰当たりな所業ではあるが「坊主憎けりや袈裟まで憎い」＝「領主憎けりや山門まで憎い」：村人の気持ちも分かる。良く考へると、領主の権威の象徴である門が領民に倒されると言ふのはギネスブックに登録したいくらいの珍事件であるけれども、特に領民は罰せられなかつたようで、事件の根源には領地八千五百石のお墨付きが無かつたことが起因している。

藩の機密事項であるから漏れる筈は無いのだが現代でも隠せば隠すほど秘密は漏れる。最初から堂々と公表して置けば漏れる秘密は無くなると思ふけれども…この地域は戦国時代に小田・大掾・佐竹の各豪族が取つたり取られたりしていた地域であるから、領民が疑い深くなつて来た。本堂茂親の志筑領八千五百石支配について徳川秀忠の許可は得られていても、正式な書類は家康に配慮して発給が遅れていた。領民がそれを知つて「偽領主」と決めつけたのである。家康は元和二年（一六一六）に死亡しているから問題は無いのだが、本堂茂親は笠間城番（尾張藩主・徳川忠吉の守役であつた小笠原吉次の失脚によるもの）、大阪冬の陣への出兵、大阪夏の陣に際しての二条城守備、家康の死去に伴う伏

見城の守備、二代將軍・秀忠と継嗣・家光の上洛に伴う供奉など忙しく、奉公していたから勲功による他所への加増・領地替えなども検討されていたのであろう。

結局、徳川家光が三代將軍になり、水戸藩が徳川御三家に格付けされた序のように志筑領が本堂茂親に与えられた。寛永二年のこととされる。寛永十二年（一六三五）六月二十一日、徳川家光は「武家諸法度」を定めて、「參勤交代の制度」を水戸藩（支藩とも）以外の諸大名に押し付けた。

八千五百石の本堂氏は大名になれずに「旗本」の地位に置かれたけれども、參勤交代の適用を受けることになった。旗本ながら參勤交代を行う立場の領主は「交代寄合（こうたいよりあい）」と呼ばれたが、本堂氏は後に五万石以下の外様大名で上位の者と同じく「江戸城柳之間詰め」となった。

吉良上野介で知られた「高家（こうけ）」は主に足利系を主とした名門甲冑の末裔であり、幕府から朝廷への使い、日光東照宮への代參、公家などの接待、江戸城内の典札などを職務とした宮中の式部官のような職務らしく格式は高いが禄高は極めて少ない。従って仕事の内容を接待役などに任じられた大名に教えて「付け届け」を貰い収入に当てる。高家にとっては「賄賂」も収入の一部なのである。吉良上野介は高家のトップであるから贈り物も高額でなければ釣りが取れないので「忠臣蔵」は浅野内匠頭が、其の辺りのことを良く理解していなかったか、或いは贈り物をケチんだことが原因で起こった。現代感覚で賄賂を否定すると一方的に吉良が悪者になってしまう。

高家に次ぐ職務が交代寄合で、由緒のある家系の武士が選ばれた。一般に時代劇などに登場して

就職活動のようなことをするのは「寄合席（よりあいせき）」の旗本であるが、これは仕事に就けない予備役組であるから全く別である。交代寄合は幾つかの組に分かれており、その中で高家のように江戸城内の典札を担当する旗本たちは「表御禮衆（おもておんれいしゅじゆ）」と呼ばれた。職務内容は詳しく伝えられていないが、例えば江戸城内で祝いの事が有った場合に、將軍に御酌をしたりするらしいから、常に將軍の身近に居る。本堂茂親は、交代寄合表御禮衆に属していた。時代劇では「旗本八万騎」などと言われるが実数は三千家ほどらしく、八千五百石の本堂氏は禄高でも常に五番以内に入る旗本の本身であつたらしい。徳川幕府は半信半疑ながらも本堂氏が清和源氏の末裔であることを認めたことになる。

正保二年（一六四五）、本堂氏は陣屋を佐谷地区から志筑城跡に移した。龍神山麓を回った恋瀬川が府中（右圖）領の染屋地区に接する辺りの南方高台に在る場所で、鎌倉時代から南北朝時代を経て室町時代に及ぶ戦乱の世に在地豪族による攻防が繰り返された古城であり、さらに城の下は、かの藤原宇合が常陸国司在任中に「筑波山に登る歌一首」として――

「草枕 旅の憂いを 慰もる 事もありやと 筑波嶺に 登りて見れば 尾花散る 師付の田井に 雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白波立ちぬ 筑波嶺の よけくを見れば 長きけ（日）に 念ひ積み来し 憂は息みぬ」

#### 反歌

「筑波嶺の裾廻（すそみ）の田井に秋田刈る 妹がり遣らむ黄葉（もみじ）手折らな」と詠んだ万葉集ゆかりの場所である。

名勝地・師付（志筑）の田井を眼下にした志筑城跡に陣屋を移したのであるから本堂氏は源氏末裔に相応しく優雅に格調高く居れば良いのだが、世間の荒波は名門も水門も一気に打ち砕いて押し流す。陣屋移転の年に、領主の本堂茂親は「甲府城番」という職務を命じられた。旗本でもポストが少ない公職に就くことは難しい時代であるから、この人事は大拔擢なのである。しかし……

徳川家康は織田信長と違つて滅亡した武田氏とその領土・甲斐の国を重視していた。武田の遺臣も徳川家臣団に組み入れられており、特に新設された水戸藩には多かつた。甲府城は武田勝頼が織田信長に滅ぼされた後に支配者が徳川家康、羽柴秀勝から浅野長政らに替わり、家康が江戸幕府を創設してからは將軍の子が名目上の甲府城主になっている。三代將軍・家光の弟・大納言忠長は元和二年から寛永九年まで甲府城主であつたが、幼少の頃から將軍の座を巡つて家光と確執があり「横暴な振る舞いが有つた」として徐封された。父親の秀忠と母親のお江の方は、幼時から家光よりも目立つ忠長を將軍にしたかつた……という話は良く知られている。

寛永九年（一六三二）から寛文元年（一六六一）まで甲府城は城主不在であるから、その間の正保二年に本堂茂親が事実上の甲府城主として拔擢されたことになる。この職を無事に勤め終えれば、名目上は旗本でも実際には外様の小豪族である本堂茂親も文字通り「徳川一門」に入れる。茂親は喜び勇んで新任地に向かったのだが、その途中で落馬し、打ちどころが悪くて死亡した。何処で落ちたのかなど、詳しいことは馬の名譽のために秘密にされたようだが、埋葬されたのが陣屋

下の寺であるから、近くであつたらう。

甲府城は再び將軍の親族らが城主となつた後に江戸時代中期からは「甲府勤番」として中・下級旗本が二百名ほど常駐することになり、高級旗本が、その監督者「甲府勤番支配」に任命された。

これらの勤務は遠隔地なので「島流し」のように嫌われたらしい。本道茂親が任命された頃が華であつたと思われる。そういう意味でも本堂氏のために茂親の挫折は惜しむべきことであつた。

茂親の後は源七郎栄親―源七郎玄親(はるちか)―源七郎伊親(これちか)と続いたが、伊親には嗣子が無く、甥に当たる戸川氏(交代寄倉)から小太郎と言う養子を迎え主計高親(かずえとかちか)として跡目を相続させた。戸川氏は備中国吉備郡庭瀬の旧領主で、関ヶ原合戦で敗れた宇喜多秀家の重臣であつたのだが、お家騒動で離藩し徳川家康を頼つて関ヶ原合戦には東軍に加わつた。戦功により旧領地で大名として存続していたけれども、本流に継嗣が絶えて断絶し、辛うじて分流が交代寄合として認められた家系である。そのために、大名並みに本丸だけが城を持っていた。ところが、この高親にも嗣子が無く、清和源氏和賀の支流を称していた本堂氏はこれで断絶することになった。和賀氏そのものが源氏としては少し怪しいところがあつたから、断絶しても誰も困らなかつたのだが、当時の幕閣で「源氏の名跡」を有効に使つた人物がいる。

足利尊氏は八幡太郎源義家の子・義国から足利義康―義兼―義氏―泰氏と伝わつた家系と言われる。その泰氏の次男である渋川二郎義頭が姓を「板倉」と変えて板倉五郎義頭と名乗り、子孫は三河国辺りに住んで徳川氏の祖とされる松平氏に

仕えていたが、戦国時代に主流は討ち死にした。幼時に僧籍に入つていた子があり、それを知つた徳川家康が還俗をさせて家臣にした。

板倉一族は幾つかの系統に分かれて二万石から五万石ぐらいの譜代大名として広がり、重要な職務を成し遂げたり幕政に関わるものも多かつた。

大坂冬の陣で豊臣方が降伏した際に軍使として乗り込んだ板倉重昌、関ヶ原合戦後の京都所司代に補された板倉勝重、徳川斉昭と親交が有り国防について論じていたという板倉勝明、水戸出身の徳川慶喜が十五代將軍として「大政奉還」などの難局に対処した際に側近として補佐した板倉勝静(かつきよ)などが知られている。板倉勝静は備中松山藩主であつた。余計なことではあるが映画でお馴染みの「寅さん」が放浪先の町でお寺に転がり込み、坊さんのお供をしている時に、その寺で法要があつた。それが妹の旦那の実家の法事で大騒ぎになる―その場所は備中高梁(びつちゅうたかはし)とされていたが其処が松山藩である。

その他に板倉一族は関宿、伊勢亀山、遠江相良、安中、鳥羽、陸奥泉、三河中島、深溝、岩槻、福島などの諸領地を移つていたのだが、後半には備中松山と安中の、共に城持ちの藩に落ち着いた。徳川斉昭と親交があり、マラソン競技を真似たような「遠足(とおあし)」という行事を始めた板倉勝明は幕末の安中藩主であつたが、その何代か前に安中藩に定着した藩主は板倉勝清という人物である。丁度、名奉行としてお馴染みの大岡越前守が登場した享保二年(一七一七)夏頃に江戸城に行つて、替わつたばかりの將軍・吉宗に御挨拶をした。祖父が將軍・綱吉に仕え、父が將軍・家継に仕えていて若死にしたから、その縁故もあつて気安く

將軍に会えたのであろう。父親は板倉家の生まれでは無く、祖母が板倉の血を引いている。

勝清は三年後には伊豫守に任官し、やがて大番頭(おおばんがしら)代表的武官、戦時には先鋒を務め、平時には江戸城・大坂城・二条城の警備責任者から奏者番(そうしやばん)江戸城で武家の典礼を扱う役)に任じられた。このコースは近代で言えば旧制一高から東大に進んで高級官僚になるようなもので、奏者番から寺社奉行、次に大阪城代・京都所司代、そこから若年寄―老中―というパターンが江戸時代のエリートコースであり、勝清は正にその通りの道を進んだのである。宝暦十年(一七六〇)には九代將軍・徳川家治の御側御用人(將軍の秘書官)を命じられているから、経歴には一層の箔が付く。

志筑領を支配する交代寄合で、清和源氏の血を引くと称した本堂氏に継嗣が無く断絶する―という報告が幕閣に上げられた時、板倉勝清は若年寄の職にあつた。この職務は旗本を統括するから、事務的に処理すれば本堂氏は御家断絶、志筑領を天領(幕府領)にして置けば済む。「公明正大」を家康に見込まれて京都所司代を任された先祖の板倉勝重ならば、そうしたであろうけれども野心家の勝清は「功迷勢大」を目論んだ。正論としては「清和源氏の本堂氏を断絶させることは惜しい」と考え、内心では自分の意図を体する者に継がせておけば役に立つと思つたのである。

板倉勝清には五人の男児があつた。嫡男はともかく、残り四人の子が居て末子は嫡男の養子になつてた。そこで勝清は、四男の大蔵親房を本堂源之助栄親の養子に据えて大和守親房としたのである。板倉氏も清和源氏、本堂氏も清和源氏を称

していたから単純には合っている。しかし両氏とも家系が揺るぎ無く存続して来た訳ではなく特に本堂氏は和賀の支流であるから無理をすることも無い。源氏を称した武家は他に何人も居た。ただ大勢の家臣を抱えている武家が断絶することは、それだけの失業者を世に出すことになり、理屈をつけても残せば救済策にはなる。当時の社会としては良かったことかも知れないが、この本堂氏に限って言えば強引で変則的、個人的意図による人事が藩と領民に苦痛を与えることになった。

寛延二年（一七四九）、志筑領八千五百石は本堂親房の支配するところとなった。領主の身分は変わらなかったが、江戸城で政務を執る現職閣僚の実弟であるから、領民にとっては「朱印状の無い偽領主」と軽視していた本堂氏とは違った接し方が要求されるようになる。板倉勝清が任命されていた「若年寄」という職務は旗本・御家人（將軍の直臣ではあるが、將軍に拜謁が出来ない下級の者）の監察が主任務である。

將軍を頂点とする徳川幕閣の責任者は、「老中（特別な場合には「大老」が置かれた）」で、この職は大政に参与し庶務を総理する執政の役ではあるけれども、管轄するのは側衆、高家、三卿家老、大目付、大番頭、奉行職（寺社奉行を除く）、交代寄合、地方の奉行、甲府勤番など、主に大名が任命される役職であった。

これに対して「若年寄」は大政に参与するけれども、管轄は旗本の行う職務であり「旗本支配」とも呼ばれた。したがって所掌する範囲は江戸城番役、小姓組、普請方、納戸方、弓・鉄砲の組、消火・火事場支配、河川船舶取締、右筆（書記）学者や儒者、医師、天文方、食事の膳番、馬係、菓

草園、書物、絵師、数寄屋坊主（殿中に奉仕する坊主頭の給仕係）、テレビでお馴染みの火付盗賊改から寄合席（交代寄合より少祿の集團）など、かなり広範囲、多種多様であった。

志筑領主になった板倉親房こと本堂大和守親房は「交代寄合」であるから老中の支配下にあつて本来の職務（閑職ではあるが）を果たせば良いのであるが、親房を本堂家に押し込んでくれた兄貴が幕閣での勢力拡充を目指して親房を次々と要職に付けた。さらにこの兄貴は若年寄の上司にいた大名の娘を親房の妻に貰い受けたらしい。その大名が誰なのか？勝手に推測してみると、当時の若年寄で、板倉勝清の上役になりそうな大名は春日局の家系である堀田出羽守正陳（まさのぶ）だと思われる。過去に堀田氏は板倉氏と養子縁組をしているし正陳には許婚に死なれた娘が居る。この女性を親房の奥方にして置けば都合が良い。

その効果があつて、旧千代田村誌によれば本堂親房は大番頭、大阪城定番、二条城定番、將軍の側用人などを命じられたという。言わば名門の家系を保存するのが目的のような交代寄合の主人が幕府の要職に就くこと自体がおかしい。この場合も本堂家に入ったのが若年寄の実弟でなかったならば、暇を持て余しても要職には就けなかった筈である。領主の出世は名誉と考えれば良いのである。志筑領はこのボスの所為で酷い目に遭う。

官庁でも企業でもトップが変われば仕事の方針などガラリと変えられることは珍しくない。国家事業でも同じである。本来は一貫しなければいけないことでも、親分が自分の功績を残す目的で、やたらと改革では無く「怪攪（いかかく）無意味にかき回すこと」をする。現代でもそうであるから江戸時

代に領主が変わった：それも権力で押し掛けて来た：本堂家では大騒ぎになった。

先ず新しい領主が、板倉から付けられた側近として家臣を連れてきた。その連中は「虎の威を借りる狐」の立場なので、秋田以来の本堂家家臣との間に対立が生じ、結局は従来のが否定されるようになった。さらに領主・本堂家の職は交代寄合なのに、輸入した領主は交代なしで江戸に居座ったまま出世コースを歩き始めた。国許には殆ど帰って来ない。板倉系の家臣が幅を利かすようになって旧臣との間に対立が起こり、権威を振り回す板倉系家臣に呆れて領地を離れる武士も増え領内の統治に混乱を生じた。

さらに、領主が幕府の要職に就くことにより本堂家の出費が嵩み、会計帳簿が消防署の書類のように次々と赤くなつていった。単純に考えても、本来は諸侯と呼ばれる大名が就く「大坂城番」などに八千五百石でチャレンジしても資金が足りる訳が無いし、役を貰うとなれば「袖の下」も要るのである。出費がどんどん嵩んでも収入は領民から徴発する年貢だけであるから中途半端な油工場の職人のように「絞る」ことしか知らない役人が年貢を増やすことを考える。現代でも無能な政府が簡単に税を上げるような感覚で増税を決めた。

明治二十年代のこと、当時の「やまと新聞」に採菊散人のペンネームで書かれた「義民助六伝」が五十数回に亘り連載されたと言う。この採菊散人と言う方は東京日々新聞の創刊者であり、日本画壇の至宝と称された鏑木清方師の御尊父だそうである。このことは、評伝ものに本領を發揮したと言われる作家・随筆家の村松稍風（むらまつしょうふう）が昭和三十一年三月の読売新聞に書いた「日



本権史」の中で触れているらしい。一方で同じ頃に、義民・助六の子孫の方から採菊散人の著を見せられた土浦在住の方が、茨光出版部から「義民助六伝」を発刊された。

本来は前文に続けて、本堂氏に入り込んだ板倉某が、自分の出世の為に過酷な税を課して領民を苦しめた―その結果、領民が「減税の嘆願」を幕府高官に直訴をした。しかし願いは聞き入れられず、助六という代表者が処刑された。そのことを書けば良いのだが、義民助六のことは伝記の他に「志筑の農民一揆」が昭和六十年代に出版され、平成二十年には「常陽芸文」でも触れている。磨崖仏でも知られた閑居山にも助六地蔵が建てられていて地元の方は御存じであるから、当時の千代田村長が「義民助六伝」に書かれた序文を引用させて頂く。この序文で当時の悲劇（悪領主により抑圧された領民の苦難）は十分に推測できる。

「其の範圍こそ小なりと雖も其の精神、その行為は、かの義民佐倉宗五郎に比するも遜色なきに拘らず現代世人より忘れ去られ広く江湖（こうこう）世間に忘れざるを遺憾とし篤学の郷土史研究家土浦の矢口豊司君私財を投じ、東奔西走史実を集輯、旧志筑藩（領・立藩は幕末）下佐谷村の義民助六伝を上梓（じょうし）す。

義民助六は今を距（へだた）る百八十年前、安永時代、舊（旧）志筑藩（領）下佐谷村の名主なり。当時凶作相続き、加うるに領主大和守、俗吏に禍ひされ藩政乱れ奸吏の横暴其の極に達し八千農民過酷の重税に泣く。義心強き助六、見るに忍びず、同志と共に難民救済を謀り、自ら二十五ヶ村の名主総代となり、時の老中（この時の老中は板倉佐渡守勝清）に直訴す。

当時、直訴は御法度にして重罪の故を以て打首となり、その首級は城下（領内）に曝（さら）さる。助六元より覚悟の上とは言いがたが、その無念如何ばかりぞ。八千の農民悉く（ことごとく）慟哭（どうく）大声で泣き悲しむ。然るに間もなく首をはねし俗吏、助六の霊に悩まされ而も百ヶ日忌の日に至り、志筑城（陣屋）及び江戸屋敷同時に火を發し焼失せりという。

ここに於て領主其の非を悟り奸吏を斥け（しりぞ）け、靈をまつりて助六大明神と稱（と）なう。その後、藩政日に日に改まり、農民日に日に氣色蘇（よ）みがえり、志筑領又榮え連綿として今日の千代田村に連る。義人以て冥（よ）すべし。

矢口君一巻の書を刊行してこの史実をあまねく天下に廣め、わが郷土の生める義民助六を顕彰すると共に日毎にすたり行く政道刷新の資に供せんとす。誠に尊い哉。百八十年前の當時を追憶し、義民助六の霊に合掌し篤志家矢口君に満腔の敬意（まんかうのけい）を全身で表す敬意と感謝を捧げて敢えて請わるとまに一言を記して以て序とする次第である。

昭和三十一年五月

千代田村長 川俣惣右衛門

余計な事を言わせて頂けば、村長さんが「ここに於いて領主其の非を悟り奸吏を斥け靈をまつりて助六大明神と称う。その後、藩政日に日に改まり…」と書かれたのは、大サービスで、現代の村の繁栄に繋がる文言であろう。僅か八千五百石で大名並みに恰好を付けていた本堂氏は常に財政困難に陥っており、府中辺りの商人から借金を續けていたようで、その担保に武門のシンボルである出陣の纏（まと）まで出していた。また幕末に

## ギター文化館 2013 CONCERT SERIES

- 3月24日 長野文憲 ギターリサイタル  
ギター文化館開設20周年記念コンサート  
3月30日 Aプログラム 鈴木大介 大萩康司  
Bプログラム 荘村清志 福田進一  
3月31日 ビッグ4の饗宴  
荘村清志 福田進一 鈴木大介 大萩康司  
4月8日 里山と風の音コンサート  
4月28日 大崎芳 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35  
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で  
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465  
Tel 0299-55-4411



新撰組から勤皇派に転じて近藤勇に暗殺された伊東甲子太郎と弟の鈴木三樹三郎（兄弟）の父親は志筑の家臣であったが、家老と対立して脱藩したよなので、不条理に領主不在の志筑領は統治がシツクリ行かず、混乱は続いたと思う。

かつて源頼朝の後胤と称した本堂茂親は、秋田から来て威徳院を仮の陣屋とし憧れの関東平野を領地とすることが出来た。その時に「余所者」として領民が怪しんだ一行を迎えてくれたのは地元有力者・福田与惣右衛門である。そして、その子孫である人物こそが本堂親房に首を斬られた助六その人である。血縁は無いけれども本堂氏は典型的に「恩を仇で返した」ことになり、武士の風上にも置けない所業として悪名を後世に伝えるべきだと思うのだが：先に「歴史は勝者の記録で、蔭にある弱者の悲劇は後世に伝わり難い：」と書いたけれども、志筑領内で起きた義民助六の伝記などは貴重な歴史として伝わるべきであろう。

何よりも冒頭に述べたように合戦を職業とした武士が「運不運」に左右されるのは致し方の無いところであるが、その家難に際して犠牲を領民に押しつけることは許されない筈である。領民が居なければ百万石も八千石も成り立たない。戦国時代から徳川時代まで権謀術数（けんぼうじゆつすう）巧妙なばかりことを用いて仙台藩を興した伊達政宗は百万石を目指しながら打つ手を誤り六十二万石に留まったけれども、その在世中に領民を苛めた記録は見当たらない。

真実か虚構か疑問はあるが当事者の主張では源頼朝の遺児・千鶴丸を祖とする和賀氏の生き残り分流を自称した交代寄合・本堂氏は「義民助六の処刑」という拭い難い汚点を残しながらも志筑領

主として幕末を迎えた。徳川慶喜が保身の為に捨て身の構えで政権を放棄したとき、幕藩体制に組み込まれていた諸大名三百諸侯のうち薩摩、長州、土佐、肥前などを主体とする官軍に敵対した藩は東北、北陸を中心に四十ほどあり、その他の藩は不承不承ながら新体制に恭順を示した。かつて豊臣秀吉が奥州全土を侵略した当時の再現である。

大政奉還の後に明治新政府は各藩・各領主に対して諸家の身上書を提出して服従の意思を明らかにするよう通達した。報告書の内容と官軍に対する協力・敵対の程度によって、勤務評定を行ったのである。関ヶ原合戦後に徳川家康が断行した勤務評定で没落した長州藩と、言い訳で逃れた薩摩藩が評定者である。各藩はサービスなど期待できないから、徳川幕府との関係を曖昧にすることに苦心した。この報告で最も気を使ったのは藩並みの組織を持つ「交代寄合」であろう。「旗本」と言えば朝敵・徳川の家臣と看做されるし「外様大名」と言うには禄高が足りない。こうした領主は新田開発や領地見直しを理由に禄高の訂正、つまり「高直し」を申請して大名格を取得し「藩」としての認知を受けた。八千五百石の志筑領・本堂氏も一百万石の高直しが認められて明治元年に念願の「志筑藩」が成立した。

さらに官軍側の通達は、旗本など小さな領主には伝えられなかったようで、本堂氏は官軍が進駐してきてから出頭が遅れた言い訳を付けて総督の許に老臣を派遣したり、東海道に出張して焚き出しをしたり、警備要員を出したり、あらゆる協力をして辛うじて格付けを貰ったようである。官軍に提出した嘆願書が茨城県立図書館の郷土資料室に保存され、その文中に次のような記載がある。

「：私家之濫觴（らんしょう）は右大将頼朝の男、式部大輔忠頼奥州和賀に封ぜられ其孫忠政出羽之仙北に分かれ豊太閤に至り和賀衰弱本堂一家に罷り成候処 慶長六年六月 佐竹氏所替之節常陸国新治郡志筑に移転仕り従 此時高僅に八千石余 之に傾居候得共 於故 幕府も外様万石以上の取扱にて代々柳席に列し 隔年江戸え参勤交代し 領民撫育罷り在候」(中略) 文には「：万石以上の軍役を務めるから：」とも書いてある。軍役は余計な出費であり年貢も増える。「領民撫育」は全くの嘘になり、義民助六の事件を反省していないのだが官軍はそれを知らない。

領民に苦しみを与えた領主が、自分たちの身分の格付けだけの為に「名門」を主張する—この中で源頼朝が先ず怪しいが、官軍の主力である薩摩藩も祖先は源頼朝だと称していて明治維新までは源氏の氏神とされる鎌倉の鶴岡八幡宮社殿の鍵を本堂、島津両家が預かっており頼朝祭（法事）が行われる場合には先ず本堂家が、次いで島津家が焼香する（始祖の出生順慣習であったと言われるから、本堂氏格上げについては官軍に居た島津藩士の鼻肩があつたかも知れない。こうして志筑藩主は「男爵」になっている。馬鈴薯でも男爵になれるからどうと言うことは無いのだが：。

地下の伊達政宗がこれを知ったら「一百万石ぐらいで騒ぐな！堂々とやれ！」と言うであろうか：。政宗の娘婿である松平忠輝は、家臣が徳川秀忠の旗本を斬った事件で家康の死後に失脚し、やがて謎の死を遂げる。事件とは無関係に忠輝が消されたようでも不可解であるが、その真相は、忠輝が政宗の影響でキリスト教に傾いていたからと推測されている。このことについて政宗は何の咎めも受

けておらず、やがて政宗の命で、支倉常長ら一八〇余人がメキシコ經由イスパニア（スペイン）に向かい国王フィリップ三世に謁見、キリスト教洗礼を受けてローマ法王にも正式に会っている。

しかし伊達政宗自身はキリスト教の信奉者ではなかったと言われており、使節派遣の目的も海外雄飛のための偵察とする説がある。政宗の意図に反して、時代は徳川家康―秀忠―家光…と閉塞的な武家支配の社会が日本に形成されてゆく。政宗が築いた仙台藩は百万石の夢を失いながらも幕末まで大藩を保ち、明治維新では「奥羽列藩同盟の盟主」として官軍に抵抗する。勤務評定の結果、表高十八万石に減らされたが家名は残った。十八万石が実高では二十八万石もあったというのは流石に伊達政宗がつくった藩である。

時代は明治となり、源頼朝も豊臣秀吉も徳川家康も野望を振りかざした過去の人物でしかなく、新たな野心家が次々と日本を食い荒らす…。

（第四章 終り）

## 【風の談話室】

桃の節句、ひな祭りが終わった途端に梅の花が一斉に咲き始めた。しかし、これは梅の開花が遅いのではなく旧暦の三月三日をそのまま新暦の三月三日にしようとしたのが原因が起きているのである。とはいえ、今年も例年になく寒さが厳しい冬であった（本当は例年が暖かかったのだらう）。

昨年は、年が明けてしばらくして春の香である露の晝を褒めることが出来たのだが、今年もひな祭

りの後になってしまった。

春の香の喜びを褒めるのが少し遅くなった今年であるが、間もなく東日本大震災からまる二年となる。災害の復興は、実質ほとんど進んでいないと言えるのではないだろうか。

復興に向けての政治の在り様はお粗末極まりないが、その政治家を当選させ政を任せたのは自分達なのだから、自分自身でそのことを考え、国民としての責任を果たすことを改めて考えねばならないだろう。

今、ふと「反省」と言う言葉が思い浮かんだのであるが、この反省はもう死語になってしまったのだらうか。

反省は無責任に済ますことが出来るけれど、反省は本人の心の深層に係る事なので、短絡的な現代人にとって不都合なことで、もしかしたら捨てられてしまったのかも知れない。

折角だから反省と反省の意味を紹介しておこう。

「反省」＝自分の過去の行為について考察し、評価を与えること。

「反省」＝深く自己をかえりみること。

少し前であったが「反省」だけなら猿でもできるという言葉が流行ったが、なかなか意味深な流行語である。

## 【ヨイシヨ広場】（陸平をヨイシヨする会）

縄文人の食と祈り

田島早苗

平成二十年から十九年計画を立て、二年毎に行われている美浦村陸平貝塚の確認発掘調査に依り、

大量の貝殻に守られた動物や魚の骨も見つかり、意外にバランスの良い豊かな食生活を送っていた縄文人の実態を垣間見ることが出来る様になってきた。

また美浦村の法堂遺跡からは、製塩土器の破片も大量に発掘されている。もしかして塩で貝の加工をして交易などに利用していたのでは？ 等と素人の空想は果てしなく広がる。

確認調査三回五年間の成果を踏まえ、「陸平縄文人の食生活を探る！」と銘打ったフォーラムが行われることになり、我が土器部会では製塩土器と塩造りに挑戦することになった。寒波襲来の二月十一日、部員九名の汐汲み部隊は、二台に分乗してひたすら鹿島へ。

祝日の鹿島漁港は東京を始め県外ナンバーの車で混み合っていた。釣り船の管理事務所前に駐車して、最初は文句を言われないかと恐る恐る始めた汐汲みだったが、綱に下げたバケツが浮いてしまい中々上手く行かず、皆派手な叫び声を上げて寒波も吹き飛ばしそうな勢いになってきた。漸くこつを掴んで汲み上げられるようになってきたが、ポテトの口に漏斗を差し込み注ぎ入れることのもどかしさ、時間ばかりが過ぎて行く。

様子を窺っていた管理事務所の係員が話を聞き、大きなポリバケツで黙って海水を汲み上げ漏斗を使わずにポリ容器へ直接注ぎ始めた。その早いこと、あつという間に満杯になる二リットルのポリ容器。ふんだんにある海水を零さないようにちまちまと漏斗を使っていた私達こそお笑いぐさだったのだ。

親切な事務所の人に感謝を捧げながら車を回しているところへ、朝早くから出航していた釣り船

が帰ってきた。大きいクーラーボックスの中には今まで見たこともない「座布団ヒラメ」と呼ばれている巨大ヒラメが一杯。

上気した顔で次々と戻って来る釣り人達のクーラーボックスの中は、どれも満杯の成果だった。よだれが出そうな顔で覗きこんでいた仲間の一人が「持たせてもらって良いですか」と声を掛けて、見事カメラに収まり、ヒラメ景気に湧いている鹿島漁港を後に一路鹿島神宮へ。

鹿島神宮の大鳥居は東日本大地震で倒壊したままきれいに取り払われていた。新年の行事も終わった境内には、思いの外参拝者が少なく、参道の土産店も人影がまばらだった。御手洗池の辺りにある店からは団子を焼く匂いが食欲をそそる。でもダイエットダイエットとお題目を繰り返しながらひたすら歩き続けたが、その境内の広さに圧倒されるばかり。石器時代の遺跡も見つかっている鹿島には、早くから信仰らしきものが芽生えていたのではないかと、またまた素人の空想が始まる。

さて塩を作るために十四日に集まった面々は先ず薪集めから始まった。里山交流館の二口竈で昔のお釜を使ってある程度海水を煮詰め土器に移して塩を作る、という手順で始まったが、煮詰まってきたら海水を足してしまったので、濃い塩水を作ることが出来ず、土器に移して周りを燃やしても、こびりつく程度、多くの塩を作るのは失敗に終わった。

フォーラム当日、残った海水を家で煮詰めて弁当箱くらいの容器一杯の塩を作ってきた仲間がいて大感激。展示した土器部会のコーナーは三宝に乗せたこの塩を中心に、失敗談も含めて評判が良

かったと自画自賛している。

三宝に乗せた塩は神聖な物で、清めに塩を使う習慣は古代から延々と受け継がれてきたような気がする。素人の妄言は許して欲しい…。

### 【ことば座だより】

#### もっと詩を書こう

白井啓治

もっと詩を書こう、と題したのであるが本当は詩を書こうよ、言葉を詠おうよ、としたかったのであった。

最近では、携帯メールなどで書いた文章を出版する事が流行っている様である。携帯メールで書いた文章をよく募集している。

文字離れたと言われて久しいが、携帯メールやツイッター、フェイスブックなどの広がり、最近では結構文章で自分を表現する人が増えているのではないだろうか。

小生、一応脚本家などと言う肩書をぶら下けているので、新しいものというか、若い人達の書いたものなどを、後れを取らないようにという訳ではないが、時々読んでみてはいる。

携帯メールなどで書くことを覚えた所為なのか、それが流行なのか、最近の文章を見てみるとセンテンスが非常に短い。センテンスの短いのはシナリオの書き方に似たところがある。また、一見して詩のように見えるものが沢山あるが詩の文章ではない。詩には程遠い、いわゆる短い説明文といえよう。

脚本業などと言うものをやっていると、自分の

紡ぎ出した言葉の文章が説明になってはいないだろうか、と非常に気を使うものである。言葉を説明の道具にするな、というのが脚本家（というか文筆家に課せられた絶対の条件である。それこそ説明の台詞なんか書いたら一発でNGが出される。ドラマと言うのは人間の葛藤と言う逡巡や洞察を表現していくものであって、葛藤の中身を物理的・科学的に説明するものではない。他人の葛藤の中身を論理的に説明されたからと言って誰も興味を示さないし、感動もしない。

言葉を説明の道具にしないで、心の葛藤表現にするためには、詩を詠うという習作を積み上げることが一番だと私は思っている。

当面する喜怒哀楽を心の響きとしての言葉の声に紡ぎ出してみるのである。今感じている喜怒哀楽を心の肉體表現としての声に発してみるのである。発した声が言葉として流れた時に、表現としての文章、詩文が生れるのである。

まあ、難しい話はさておいて、私達ももっと気楽に自分の言葉を口遊んでみたらどうだろうか。自分の喜怒哀楽を口遊んだ言葉を文字に書き起こせば、それはもう立派な詩になる。感情を説明するのではなく声の流れにして表現してみると、新しい自分を発見することが出来るのではないかと思う。

自分の心の流れを言葉にして文章にするのは人間にだけ与えられた才能・特技なのだから、それを楽しまない手はないと思うのだが…。

4月7日、ギター文化館のコンサートシリーズとして、第四回「里山と風の声」コンサートが行われるが、ここにサプライズゲストとしてヨネヤ

マ・ママコさんが友情出演して下さい。クラリネットの橋爪恵一さんが、とってもお洒落で、良い音のひびくホールです。ママコさんも一緒にしませんか、の誘いに応じてくださいました。

ママコさんには、ことば座の主催する東京公演に、伊藤道郎の最後の関係者として出演いただく事になっています。ママコさんのマイムをギター文化館で観られるとは考えてもいなかった事なので、非常に楽しみにしています。

その里山と風の声コンサートで、朗読する風の声としての眩き詩・7編が漸く出来上がったが、そのうちから二つほど紹介したいと思う。

### 「眩きの四」

フレームに切り取られた世界。

その奥に、

その裏側に

何を感じ、何を思っかは

観客の自由。

早朝。

男が歩いてくる。

女が歩いてくる。

ローアングルのフレームに切り取られた二人の足。

歩いてくる場所は全く違う場所。

右左、右左とただただ歩いてくる。

歩いてくる。

どんな男か

どんな女なのかは分からない。

カメラはひたすらに二人の足の歩みだけを追う。

それぞれの足は  
それぞれの家に辿り着き  
家の中に入って行く。

マンションのドアが閉まる。  
日本家屋の玄関の引戸が閉まる。

### 「眩きの七」

私は間もなく七十歳になる。

恋に焦がれたただの老いぼれ。

老いぼれた男の感傷なんて醜いだけ。

老いぼれた男は思った…。

川の水面に映った月の姿は

どうして

流されていかないのだろうか。

そのことをただの当り前と考えて

不思議に思わない人には

切なくて居たたまれない

恋の心はわからないのではないだろうか。

そんな事を考える私って馬鹿ですか。

湖の水面に映った月の姿は

どうして

沖に流されて行かないのだろうか。

そんなこと当り前じゃないかと言っあなた

いま恋をしていませんね。

どんなに悪臭のたつ

濁った水でも

月を映して遠くから眺めると

汚れも

悪臭も

消えてなくなってしまう。

夜の月は

夜の星たちは

いつでも潔白なこたえしか持っていない。

さて、「ふるさと」風の会では、皆様の投稿をお待ちしております。毎月25日までに編集事務局の方にお送りいただければ、翌月号に掲載させていただきます。内容の制限は一切ありません。400字詰め原稿用紙で5〜6枚程度。

4月号は、4月6日が発効日となります。

## 《ふるさとの》

マインジシ書房・書芸会館料理のお店です。

(キター文化館通り)

看板娘(犬)「うらり」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話0969-43-0000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

## ギター文化館 2013 CONCERT SERIES

### 第四回 『里山と風の声』コンサート

4月7日日曜日 (14:30 開場 15:00 開演)

#### 橋爪恵一のパフォーミング・アーツ2013春

クラリネットの奏でる風に乗って里山の木々が声をする

パントマイム界の巨星、**ヨネヤマ・ママコ**さんがサプライズ・  
ゲストとして友情出演!! 里山に風のマイムが舞い降りる。

#### 第一部 朗読里山の詩

ことば座「常世の国の恋物語百」に紡がれた恋歌を里山の風の声として作者、白井啓治が朗読する。

#### 第二部 橋爪恵一のパフォーミング・アーツ2013春

「クラリネットの魅力&パントマイムの基本」

木管楽器であるクラリネットの魅力的な響きに加え、日本のパントマイム・アーティストの第一人者のヨネヤマ・ママコが伝えるマイムの基本。歩く・走る・浮かぶ・飛ぶ…。

軽やかな音楽とダンスマイムでお届けする、小粋でワクワクする時間をお楽しみください。

ピアノ伴奏は山本光。

※コンサート料金 3500円 (事前購入 3000円) 小・中学生 2000円

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35 Tel0299-46-2457 fax0299-46-2628

## ことば座・朗読舞東京公演決定!!

10月23日～35日 両国・シアター・X(カイ)

ギター文化館発:常世の国の恋物語第33話

ホルスト作曲「日本組曲」を主題とする平将門伝説

### 朗読舞劇 苅萱姫物語

・ヨネヤマ ママコのダンスマイム

・小林幸枝の手話舞

・柏木久美子のテングエスチャー

三つのジェスチャーが一つの舞台を創り上げる世界初の舞台!!

脚本・演出:白井啓治/音楽監督:橋爪恵一/編曲:山本 光/演奏:カメレオンオーケストラ/背景画:兼平ちえこ

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35 Tel 0299-24-2063 fax 0299-23-0150